

論文の内容の要旨

論文題目 保育所 2 歳児クラスの集団での対話のあり方の変化
—社会文化的アプローチによる検討—

氏 名 淀川 裕美

本研究の目的は、保育所 2 歳児クラスにおける集団での対話のあり方の変化について、場面の違いや個人の対話への参加の仕方等を分析し、明らかにすることである。

第 I 部では、本研究の問題と目的、方法を述べた。

第 1 章では、まず第 1 節で、日常の保育場面、特に食事と散歩場面の集団での対話を検討する必要性について、主に二者の遊び場면을対象に実験的観察法を採用してきた先行研究の課題を踏まえ論じた。その上で第 2 節から第 5 節で、2-3 歳児同士の集団での対話のあり方を捉える視点について論じた。第 2 節では、「対話への参入」を捉えるため、ブルーナー(1988)の「フォーマット」概念の二層構造に着目し、同一の深層構造(その対話で実現されている発話の機能)をもつ事例間における表層構造(具体的な応答連鎖の仕方)としての模倣/非模倣の使用の変化に着目した。第 3 節では、「対話の維持発展」を捉えるため、語用論とバフチン(1988 等)の発話論に基づく分析単位を用いることを述べた。すなわち、①話者交代にともなう宛先の広がり、②発話の直前直後の関連性を支える応答連鎖の特徴と発話意図(→④⑤)、③文脈レベルでの発話内容の関連性を支える話題と話題への評価、④「他児の応答を引き出しやすい応答」の使用と⑤終助詞・間投助詞の使用である。第 4 節では対話が生じる場の固有性を捉える視点(身体的位置、媒介物、話題)について、第 5 節では対話へ参加する個人の変化に着目することを述べた。最後に第 6 節で、本研究の課題と構成をまとめた。

第2章では、全章に共通する観察・分析方法を記した。数年の予備観察後、2002年6～11月に保育所2歳児クラスで参与観察し、エピソード記述を行った。食事・散歩場面を週に一度観察し、計12日分(月の前半と後半の各一日)のデータを分析した。全事例は2ヶ月ごとの3期(前・中・後期)に分類し、さらに深層構造により“模倣する”事例、“確認する”事例、“伝える”事例に分類した。

第II部では、保育集団における2-3歳児同士の「対話の成り立ち」について検討した。

第3章では、①事例数、②対話への参入者数、③応答連鎖数、④クラス内の発話の宛先の量と方向の変化を量的に分析した。場面間の比較から、上記のいずれも散歩場面より食事場面で多かった。同じ時間と空間、物を共有し座位で向かい合う食事場面では、自由に移動でき様々な事物に注意が向きやすい散歩場面より、多人数で長く対話が生じたと考えられる。また、深層構造間の比較から、両場面とも“確認する”事例と“伝える”事例が多く、特に“伝える”事例がより多く観察された。すなわち、自分に属する情報を相手に伝えたいという志向性と、相手に属する情報を確認したいという志向性の両方が対話を成り立たせ、特に伝えたいという志向性がより多くの対話を生じさせていた。

第4章では、①身体的位置、②媒介物の有無、③話題の特徴を、場面別・深層構造別・時期別に量的に分析した。身体的位置の分析から、散歩場面では後期に歩調を合わせる、遠くの他児に近寄る等、距離を超え対話していた。座位の食事場面は、早い時期から皆が集団での対話に参加できる可能性があるのに対し、散歩場面は、体力差の縮まりに加え、他児と歩調を合わせる等、他児と意思を合わせ散歩できるようになることが対話の成立に必要であると示唆された。また、媒介物の有無の分析から、食事の“伝える”、散歩の“確認する”、“伝える”事例では、先行研究と同様、媒介物有の多い時期から無の多い時期へ変化していたが、食事の“確認する”事例では逆に、媒介物無の多い時期から有の多い時期へ変化していた。すなわち、対話が生じる場や対話の目的により、媒介物の機能が異なることが示唆された。このことについて、さらに話題の特徴の分析から、食事の“伝える”、散歩の“確認する”、“伝える”事例では、先行研究と同様、食事や散歩に関連する具体物の話題が多い時期から、必ずしも食事や散歩に関連しない抽象的な事柄(例えば、自他の心情)の話題も増える時期へ変化していた。一方、前期に媒介物無の多かった食事の“確認する”事例では、「いい?」「いちばん?」等2-3歳児が言いやすい言葉で他児の承認を確認することで対話への参入経験を重ね、後に具体物について確認する様子が見られた。

第III部では、第II部で明らかになった「対話の成り立ち」の特徴を踏まえ、「対話への参入」および「対話の維持発展」の特徴について検討した。

第5章では、「対話への参入と対話の維持」という視点から、“確認する”事例と“伝える”事例の、表層構造としての模倣/非模倣の使用の変化を量的・質的に検討した。食事場面では、模倣の多い時期から模倣以外での確認や叙述が多い時期へ変化していた。一

方、散歩場面では、模倣以外での確認や叙述の多い時期から模倣の多い時期へ変化していた。食事場面では、はじめから皆が共有する物があるため早くから模倣が見られ、散歩場面では、歩調を合わせたり遠くから話しかけたりする中で模倣を楽しむというように遅くに模倣が見られた。対話が生じる場や対話の目的により、模倣の多い時期や模倣を支える要因が異なることが示唆された。

第 6 章では、「対話の維持発展」という視点から、“確認する”事例の①宛先の広がり、②話題の共有、③話題への評価の共有について場面別・時期別に質的に分析した。宛先の分析から、食事場面では、抽象的な事柄の話題で前期に、具体物の話題で中期に二者間対話の連続が見られ、いずれも後期に三者間対話の連続が見られた。一方、散歩場面では、全期を通しほぼ全てが二者間対話で、後期の抽象的な事柄の話題のみ第三者への宛先の切替が見られた。話題と話題への評価の共有の分析からは、食事場面では前期から、散歩場面では中期から話題を共有し、両場面とも後期に話題への評価を共有していた。すなわち、後期には他児の述べた評価をそれとして受け止めた上で、自らの評価を述べ対話していた。

第 7 章では、「対話の維持発展」という視点から、“伝える”事例の①応答連鎖の維持、②宛先の広がり、③話題の展開について場面別・時期別に量的・質的に分析した。応答連鎖の分析から、「他児の応答を引き出しやすい応答」の使用は、両場面とも「自他の同異以外の情報追加」の比率が増え(後期に 5 割以上)、夏から秋以降に、様々に情報を追加しながら対話していた。終助詞の使用は、両場面とも前期から使用の多かった「よ」の比率が減り、「ね」の使用が増えた。すなわち、後期には自分の主張に重きを置くだけでなく、他児に受け入れられ、つながりたいという思いも見られた。間投助詞は散歩場面ではほぼ使用されず、食事場面では「ね」「さ」ともに比率が増え、後期に「ね」が全発話の 2 割以上を占めた。すなわち、自分のターンを保持し、他児の注意を惹きつけながら発話を続けようとしていた。宛先と話題の展開の分析からは、両場面とも前期は宛先の広がりも話題の展開も見られなかった。食事場面では、中期以降に第三者への宛先の切替が見られ、中期にはひとりが、後期には複数名が次々と話題を展開していた。一方、散歩場面では、ほとんどが二者間対話で、後期に三者以上の対話が見られたが、第三者への宛先の切替は見られなかった。話題は中期・後期ともに展開していたが、食事場面ほど多くなかった。このように、場面により、宛先の広がりや話題の展開の特徴が異なっていた。

第 IV 部では、第 II 部と第 III 部で明らかになった集団での対話の特徴を踏まえ、個人の対話への参加の仕方について検討した。

第 8 章では、各場面では他児への応答の特徴が異なる 2 名を選出し、①話題の共有・展開、②「他児の応答を引き出しやすい応答」の使用について、時期別に量的・質的に分析した。食事場面では、前期・中期に対話へ積極的に参加しなかったすすむ(名前は全て仮名)は、全期を通し質問が見られ、後期に積極的に参加し話題を展開していた。一

方、前期から対話へ積極的に参加していたひろしは、全期を通し情報追加が多かった。両者とも、後期に三種類以上の「他児の応答を引き出しやすい応答」を使用し、また、他児同士の対話を聴く経験を通し、対話の仕方を学んでいたことが推察された。散歩場面では、ひろしは自分が関心を持った物について他児に話しかけることが多く、たつやは他児にまつわる事物に関心を寄せ話しかけることが多かった。両者とも、全期を通し話題の展開は1 応答のみで、後期にも三種類以上の「他児の応答を引き出しやすい応答」の使用はなかった。このように、対話への参加の仕方の個性とともに共通点が見出された。

第V部の総合考察(第9章)では、全体の総括、意義、今後の課題をまとめた。

本研究の意義の一点目は、バフチンの発話論に依拠し観察・分析方法を決定したことで、日常の複雑さ・多様性・時間の積み重なりの中で対話の多面的複層的な特徴を描き出したことである。幼児同士の対話研究の方法論として、新たな視座を示した。二点目は、集団と個人の両方の視点から、年間の保育の流れを踏まえた2-3歳児同士の対話の特徴を一部描き出したことである。この視点は、保育者のもつ集団としての育ちと個人の育ちという視点と重なるものであり、保育者の実践知に即し、学術的な知見を示した。

今後の課題は、発達研究との関連で①個々の発達の領域と対話のあり方の変化の関係、②子ども同士の足場かけ、言語学との関連でより社会文化的な観点から、③どのように他児の言葉を取り込み、自らの言葉としているか、④何がどのように対話を媒介しているか、保育学との関連で⑤他の時期や年齢、場面での対話の特徴、⑥保育者の役割の検討を行い、保育所で過ごす2-3歳児の育ちについて実践に即し、さらに明らかにしていくことである。